2025.11.27 上毛新聞

点描ぐんま経済

日銀支店長 見聞録

■143■

ネタ多過ぎの秋

原稿の締め切りが迫っているのに、パソコンの画面は万座温泉（嬬恋村）のごとく真っ白だ。ネタがないのではない。むしろ多過ぎて整理がつかず、ネタが大渋滞しているのだ。紅葉、食べ物、スポーツ、夕暮れの山々の美しさ。群馬の秋は豊かだ。

このところ、温泉や紅葉狩りを目当てに家族や友人が次々と訪ねてくる。赤城、榛名に照葉峡（みなかみ町）などを案内したが、秋晴れのなかの紅葉は本当に心を揺さぶる。でも、案内しなかった妙義から「俺も忘れるなよ」と呼ばれている気がして、ここは独りで見に行ってきた。

紅葉の調和に魅了

山に向かう途中、街角でふと遅咲きの白いバラを見つけた。真っ赤な葉に囲まれた季節に、まだ咲こうとする一輪の姿が、けなげでつい足を止めた。小さな花が心配そうに「そろそろ原稿書いたほうがいいんじゃない？」と見上げているような気がした。

最近は、年のせいだろうか、燃えるように真っ赤な1本の紅葉より、山肌の木々の緑や黄や赤が混じり合って、互いを引き立て合う景色にひかれるようになった。個々の色が競い合うのではなく、調和して深みを生む。

友人にそんな話をすると、皆少し黙って山を眺めていた。

そんな間も、世界の動きは目まぐるしい。トランプ関税、食料インフレ、株価の乱高下…。経済の色合いは休む間もなく変化している。

ただ、調和する山肌を眺めながら思った。経済も、自然と同じで、一色だけが突出すると不安定になる。どれか一つだけが強過ぎても、持続力がない。緑が残り、黄色が混じり、ところどころ赤が差す、そんなバランスこそが強さであり、美しさだ。経済ニュースに一喜一憂しながらも、紅葉の調和を見ると、社会経済もこうあってほしい、と自然に願ってしまう。

ということで、この豊かな群馬の自然を楽しみつつ、家族や友人の案内を続けていたら、今月のネタはまとまらなかった。どれも書くべきで、どれも選べない。ぜいたくな悩みだ。

今月は、色とバランスについての「まとまりそうでまとまらなかった話」。来月、もう少し落ち着いた一色のコラムになるかどうかは、自然と市場の機嫌にかかっている。

宮 将史（みや・まさふみ）
1974年生まれ。神奈川県出身。一橋大経済学修士。2000年日本銀行入行、政策委員会室国会渉外課長などを経て24年7月から現職